

# Glocal Tenri

Newsletter

月刊 **グローバル天理** Monthly Bulletin Vol.4 No.7 July 2003

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



7

## 巻頭言

## 外辺医療と現代医学 宗教と心理療法の調和統合

おやさと研究所長 井上昭夫 Akio Inoue

ここ数年、新聞紙上に現代医学以外の治療法を紹介する書籍の広告記事が急速にふえている。『超抗ガン剤低分子高吸収アガリス ク 末期ガン治る！助かる！』『超薬プロボリス 現代の難病にプロボリスが克つ理由』などなど。監修者は医学博士や薬学博士だ。書籍ばかりでなく「健康食品」の名のもとに、サメの軟骨、クロレラ、イチョウの葉、沖縄のウコン、ノコギリヤシに各種ビタミンやミネラルの調剤など、わが家に持込まれたサプリメントだけでもまだまだある。ダイレクトメールでも次々と外資系企業が参入して類似品の積極的な勧誘が行われている。景気低迷のなか繁昌しているのは健康食品界だけではないかと思われる程である。

これらの民間療法は「外辺医療」という名でひとくりにされ、前近代的なものとして西洋医学からは長い間排斥されてきた。しかし、最近この外辺医療が再評価されはじめて、代替医療や補完医療などと呼ばれるようになった。欧米社会ではこの名前を統一してCAM「補完代替医療」(Complementary & Alternative Medicine)という略称で呼んでいる。自然を重視した伝統医療を前近代的なものから脱近代的なものへと評価を変えてきたのは、「地球の健康なくして人間の健康はない」という市民によるエコロジー意識の目覚めであるとされる(『補完代替医療入門』上野圭一、岩波アクティブ新書、2003)。現代医学がもっとも苦手とする、ガン、糖尿病、肝臓病、心臓病など、いわゆる生活習慣病に悩むひとたちに「現代医学以外の治療法」としてCAMに魅力を感じている人の数はふえる一方である。東洋医学もいまCAMとともに脚光をあびている。しかし、大切なのは特殊なCAMと普遍的先端医療、つまりローカルとグローバルの統合であろう。この「グローバル」な調和は、患者自身の選択と責任においてなされねばならないのが現状である。

インドの伝統医学であるアユールヴェーダは、風土に根ざした独自の医学体系を持っているが、鍼灸や漢方薬を主体とする東洋医学においては、人間を小宇宙と見て大宇宙と連関せしめている点が特徴である。『淮南子』精神訓は「頭が丸いのは天に象り、足の方形なのは地に象っている。天には四季・五行・九つの領域(八つの方角と中央) 三百六十六日の日数があり、人にもまた四肢・五臓・九つの穴・三百六十六の節がある」と述べている。この「節」の数は骨の数と一致し、人体の関節を上体・下体と合わせれば12関節で、1年12ヶ月に相当する。脊椎骨は、頸椎・胸椎・腰椎合わせて24個で、1日の24時間と相通ずる。こういった考えから

導き出される医学は、自然のリズムから逸脱した人間が病むのだという明確な認識を持っていて、その治療には内なる自然の秩序を回復することが第一と考えられていた。

病む身体の秩序を回復する注目すべき補完代替医療に、セラピューティックタッチという「手かざし療法」といわれるものがある。看護学専門のニューヨーク大学名誉教授ドロレス・クリーガーがその開発者として知られている。彼は看護という仕事の基本要因を「人を助けたい、癒したいという願望、患者への切実な共感、病む人、苦しむ人にたいするつよい無私の感情」であると考へ、だれもができる癒しの技法を模索していた。数々の臨床実験を通してその治療の効果に確信をもち、「セラピューティックタッチ」をマニュアル化し、今世界の75カ国でナースがその「手かざし療法」を用いている。大病院で外科医がメスを振るっている手術台のそばで、患者の頭上からセラピストが手かざしをしている光景は米国では珍しくないという。手をかざすヒーラーの絵は1万5千年前にピレネー山脈の洞窟に描かれていて、最古の文献は5000年前にまでさかのぼる。手かざしは有史以来世界各地で用いられてきた癒し(ヒーリング)の原型である。日本語の「手当て」が治療を意味することはその消息をよく物語っている。

天理教では、身上者(病人)の患部を「あしきはらいたすけたまえてんりわうのみこと」と3遍唱えて、3度撫で、これを3度繰り返す「さづけ」が、身上諭しをともなって、布教伝道の要となってきた。「さづけ」と「セラピューティック」の間には基本的な相違があるが、苦しむ人を助けたいという願いにおいては共通している。後者が脱近代化医療として普遍性をもちつつあるとき、その原因を追求して、前者に医療との共存を求めることは大切である。

ときあたかも人間関係学科臨床心理学専攻の大学院が天理大学にまもなく設置される。天理教の独自の救済環境を活かして、宗教と心理療法の接点の研究や、心理臨床の高度な知識や技能に加え、宗教的な人間理解に基づいて心理臨床の実践を行う力を身につけることを目指しているという。しかし、その理念を具体的に達成するのは、「さづけ」と「諭し」の天理教救済史が実証する実践教学サイドからの、心理療法領域への積極的関与であろう。その逆は主客転倒であるというパワフルな気構えがとくに宗教学教授陣には必要だ。そうでないと宗教私学である天理大学の独自性はまたもや普遍に埋没して、その個性を輝かすチャンスを失うことになることを憂う。